

平成 17 年度岩手県立総合教育センター

特殊学級における教科指導の在り方に関する研究

－教材分析に視点を当てた算数・数学科の
指導の在り方と実生活との関連性から－

(第 1 年次)

研究協力校

花巻市立西南中学校

岩手県立総合教育センター
特別支援教育室
佐伯 祝

〈 目 次 〉

I	研究の目的	1
II	研究の年次計画	1
III	本年度の研究内容と方法	1
1	研究の目的	1
2	研究の内容と方法	1
3	研究協力校	2
IV	本年度研究の分析と考察	2
1	特殊学級における教科指導の在り方についての基本的な考え方	2
(1)	特殊学級における算数・数学科の指導の在り方の現状	2
(2)	特殊学級における算数・数学科の指導の在り方に関する研究の意義	2
(3)	特殊学級における算数・数学科の指導の在り方に関する 基本的な考え方	3
2	特殊学級における教科指導に関する実態調査と調査結果の分析・考察	4
(1)	調査目的	4
(2)	調査仮説	4
(3)	調査対象校	4
(4)	調査内容	4
(5)	調査の結果と分析	5
(6)	調査のまとめ	8
3	算数・数学科の指導と実生活との関連性を踏まえた手だての構想	9
(1)	教材分析に視点を当てた算数・数学科の指導の在り方と実生活との 関連性を明らかにするための基本構想	9
(2)	教材分析に視点を当てた算数・数学科の指導の在り方と実生活との 関連性を明らかにするための基本構想図	9
4	算数・数学科の指導と実生活との関連性を踏まえた手だての構想	9
(1)	算数・数学科の指導と実生活との関連性を踏まえた手だての構想 にする基本的な考え方	9
(2)	算数・数学科の指導と実生活との関連性を踏まえた手だての方向性	11
V	研究のまとめと今後の課題	11
1	研究のまとめ	11
2	今後の課題	12

〈おわりに〉

【引用文献】

【参考文献】

I 研究の目的

今日、特殊教育から特別支援教育への転換が図られているものの、児童生徒一人一人の障害の特性や発達段階を大切にして支援するという考え方においては、大きく変わるものではない。特に教科指導においては、一人一人の実態に応じた指導を積み重ねていくことが求められている。

しかし、教科指導に困難を感じている特殊学級担任は多く、一人一人の実態に応じた学習課題の設定や授業の組み立てに苦慮している状況が見られる。これは、学習課題を設定する際の教材分析の観点が不明瞭であることや、教科の学習を実生活に関連付ける手だてが不十分であることが主な要因であると考えられる。

このような状況を改善していくためには、特殊学級担任が、適切な教材分析を行うための観点を整理することが大切であり、そのための手だての構築が必要である。この手だての活用により、教科の学習と実生活との関連性を踏まえた教材分析が可能となり、児童生徒の実態に応じた効果的な教科指導が実現できるものと考えられる。特に、特殊学級における算数・数学科の指導においては、実生活との関連性が強いことから、より適切な教材分析に基づいた指導が大切である。

そこで、本研究では、小・中学校の特殊学級における算数・数学科の指導の現状と課題を踏まえ、教材分析に視点を当てた教科指導の在り方と実生活との関連性について、実践をとおして明らかにし、特殊学級における教科指導の充実に役立てていくものとする。

II 研究の年次計画

この研究は、平成 17 年度から平成 18 年度にわたる 2 年次研究である。

第 1 年次（平成 17 年度）

特殊学級における教科指導の現状と課題を把握するための実態調査、調査結果の分析・考察、算数・数学科の指導と実生活との関連性を踏まえた手だての構築

第 2 年次（平成 18 年度）

算数・数学科の指導と実生活との関連性を踏まえた手だてに基づく指導実践、特殊学級における教科指導の在り方に関する研究のまとめ

III 本年度の研究内容与方法

1 研究の目的

特殊学級における教科指導の在り方についての基本的な考え方をまとめ、その基本構想を立案する。また、それに基づいて教材分析に視点を当てた算数・数学科の指導の在り方と実生活との関連性を踏まえた手だての試案を作成する。

2 研究の内容与方法

- (1) 特殊学級における教科指導の在り方に関する基本的な考え方の検討（文献法）
特殊学級における教科指導の在り方に関する基本的な考え方を検討し、まとめる。
- (2) 特殊学級における教科指導に関する実態調査と調査結果の分析・考察（質問紙法）
基本的な考え方を踏まえ、県内すべての小・中学校の特殊学級（知的障害特殊学級、情緒障害特殊学級）に実態調査を行い、基本構想の立案及び手だての試案作成に必要な資料を得る。
- (3) 算数・数学科の指導と実生活との関連性を踏まえた指導の基本構想の立案
実態調査の分析と考察を踏まえ、算数・数学科の指導と実生活との関連性に関する基本構想を立案する。

- (4) 算数・数学科の指導と実生活との関連性を踏まえた手だての構築
実態調査の分析及び基本構想に基づき、算数・数学科の指導と実生活との関連性を踏まえた手だてを構築する

3 研究協力校

花巻市立西南中学校

IV 本年度研究の分析と考察

1 特殊学級における教科指導の在り方についての基本的な考え方

- (1) 特殊学級における算数・数学科の指導の在り方の現状

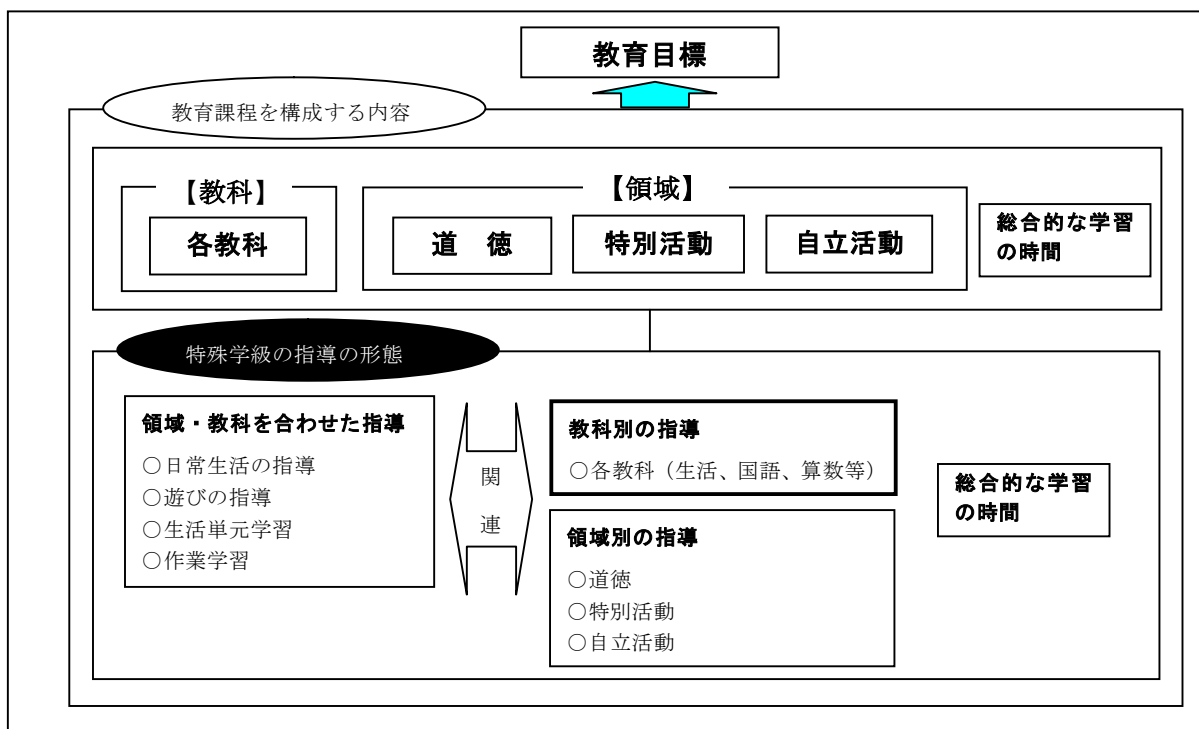
知的障害特殊学級及び情緒障害特殊学級（以下、特殊学級と表記）の教育課程は、法的な根拠（学校教育法第75条、学校教育法施行規則73条の19）により、特別の教育課程を編成することが認められている。この場合、特別の教育課程を編成するに当たっては、学校教育法に定める小・中学校の目的及び目標を達成するものでなければならないことは言うまでもない。しかし、特殊学級の算数・数学科では、教科の目的や目標を達成するために学年相応の学習内容を指導することは極めて少ない。これは、算数・数学科の学習が、特殊学級の児童生徒にとって苦手とする、識別・抽象・統合・推理・判断等の数量や図形に関する法則性をもった学習が中心になると考えられているからである。したがって、小・中学校の特殊学級では、学級の実態や児童生徒の障害の程度等を十分考慮した上で、盲学校、聾学校及び養護学校の小学部・中学部学習指導要領を参考に教育課程を編成することが認められている。

一般に、知的発達に遅れのない児童生徒の教育課程は、各教科、道徳、特別活動、総合的な学習によって編成されている。一方、特殊学級においては、次頁【図1】で示すとおり、各教科、道徳、特別活動、総合的な学習の時間で内容を整理し、それらを合科、統合して、実際の生活に耐えられる指導の形態として再編成した領域・教科を合わせた指導が行われている。領域・教科を合わせた指導には、特殊学級児童生徒が、その生涯にわたって自立的、主体的な生活の実現を目指し、日常生活の指導、遊びの指導、生活単元学習、作業学習がある。また、これと関連したものとして、教科別、領域別の指導が行われている。教科別、領域別の指導とは、その指導の形態から国語や算数（数学）等の時間を設けて行う教科別の指導と道徳、特別活動、自立活動の領域別の指導のことである。

本研究における算数・数学科の指導とは、特殊学級の教育課程における「教科別の指導としての教科」（以下、特殊学級における算数・数学科と記述）であり、知的発達に遅れのない児童生徒の教育課程における各教科の算数・数学科とは異なるものである。

- (2) 特殊学級における算数・数学科の指導の在り方に関する研究の意義

特殊学級児童生徒への算数・数学科の指導の充実があらためて取り上げられている背景の一つには、保護者からの教育的ニーズがある。それは、算数・数学科の授業で身に付けた力を実生活の中で活用できるようにしてほしいというニーズである。しかし、小・中学校の特殊学級では、こうした教育的ニーズに応えるための具体的な方法や取組に対して検討が不十分であり、保護者との連携を重視した実践的な取組を手だてとして構築する段階には、まだ至っていないと考えられる。また、特殊学級における算数・数学科の在り方に関するこれまでの研究の多くは、題材の工夫、教材の開発に視点を当てたものを取り上げている研究であり、このことから実生活に活用することを第一に据えた特殊学級の算数・数学科の指導について追究すること



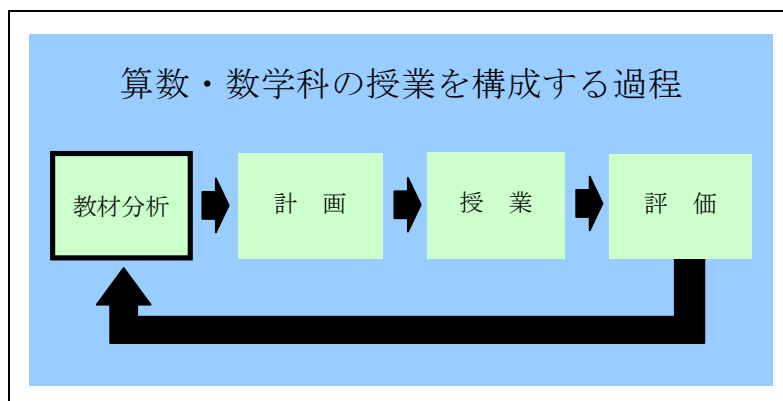
【図1】特殊学級における教育課程

は意義があることと考える。

(3) 特殊学級における算数・数学科の指導の在り方に関する基本的な考え方

ア 算数・数学科の授業を構成する過程

小・中学校で行われている算数・数学科の学習は、一般的に【図2】に示すとおり、教材分析を基に学習計画を立て、授業を行い、評価をするという一連の過程に沿って行われている。これは、特殊学級の算数・数学科の学習についても同様であるが、特にも特殊学級における



【図2】算数・数学科の授業を構成する過程

「教材分析」は、教材をとおし

て教えることの意味や目的を実生活の中で生きる力をしてとらえ、児童生徒の実態を基に明らかにしていくものであり、授業の根幹をなすものであると考える。

イ 教材分析を行うための視点

特殊学級担任は、特殊学級を初めて担当する者や、特殊教育経験年数が浅い者であることが少なくない。そのため、算数・数学科における既習事項の理解や程度に関する児童生徒の実態を把握することに難しさを感じている。また、児童生徒の実態把握に応じた学習課題を設定することや授業の

【表1】教材分析を行うための視点

実態把握	算数・数学科における既習事項の内容や理解の程度を把握すること
系統性	算数・数学科における題材の順序性や発展性のこと
実生活	算数・数学科で学習したことを実生活の中で活用する場面のこと

組み立てに困難さを抱えていることが多い。これは、特殊学級担任が、指導計画の立案や授業実践における具体的な指導方法、評価の分析に多くの時間を費やしているのに対して、教材分析の視点、すなわち児童生徒の実態把握や系統性を踏まえた題材の設定、実生活における活用等に目を向け、あらためて問い直す機会が少ないためと思われる。

そこで、本研究では、教材分析をする際の視点として前頁【表1】に示すとおり、実態把握・系統性・実生活ととらえ、研究を進めていくこととした。

2 特殊学級における教科指導に関する実態調査と調査結果の分析・考察

(1) 調査目的

本調査は、県内の小・中学校の特殊学級を対象に、算数・数学科の指導の在り方の現状と課題を明らかにし、望ましい指導の在り方の資料を得るために実施した。

(2) 調査仮説

調査仮説として次の3点を設定した。

○調査仮説1 小・中学校の特殊学級担任の多くは、算数・数学科において、既習事項の内容や理解の程度を客観的な方法によって把握することができていないのではないか。

○調査仮説2 特殊学級の児童生徒の実態に合った題材を設定する際、系統性を踏まえた設定になっていないのではないか。

○調査仮説3 算数・数学科の学習の成果が、実生活の場面において活用できるように工夫されていないのではないか。

(3) 調査対象校

本調査は、県内すべての公立小学校と公立中学校において特殊学級を設置している学校、小学校 163校、211学級、中学校、108校、120学級、計 271校、331学級を対象に行った。それぞれの回答状況は【表2】に示すとおりである。

なお、本調査では、知的障害特殊学級と情緒障害特殊学級を対象に行ったものである。

【表2】調査紙の回答数と回答率

小学校	回答数	207/211 学級
	回答率	98.1%
中学校	回答数	118/120 学級
	回答率	98.3%
全体	回答数	325/331 学級
	回答率	98.2%

(4) 調査内容

調査の内容は、【表3】に示したとおりである。

【表3】調査紙の質問内容

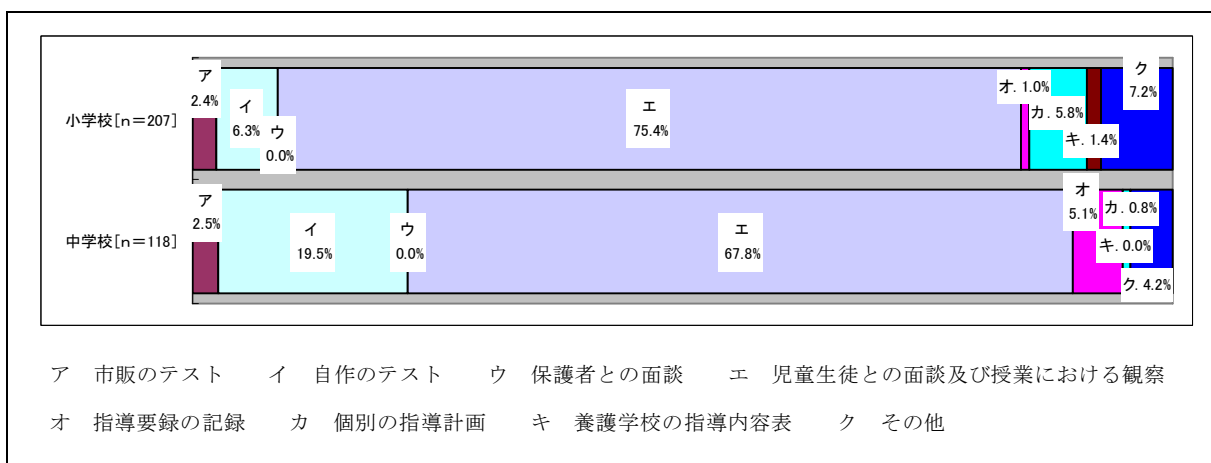
- | | |
|-----|-------------------------------------|
| I | 算数・数学科における児童生徒の既習事項の内容や理解の程度や実態について |
| 問1 | 実態把握の方法 |
| 問2 | 実態把握の方法にかかわる根拠 |
| 問3 | 実態把握の状況 |
| II | 題材の設定について |
| 問4 | 題材設定時の困難さ |
| III | 算数・数学科の指導の実際について |
| 問5 | 扱っている題材 |
| 問6 | 題材を教える上での困難さ |
| 問7 | 困難さの理由 |
| IV | 題材を実生活に生かすための工夫 |
| 問8 | 題材を実生活に生かすための工夫 |

(5) 調査の結果と分析

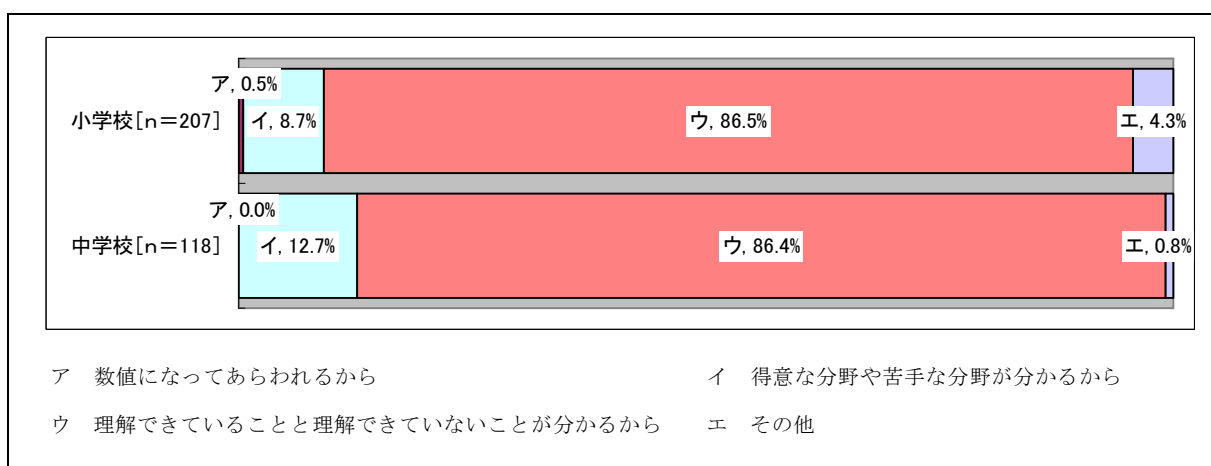
ア 算数・数学科における実態把握の方法とその方法を選んだ理由について

【図3】は、小・中学校における特殊学級担任（小学校は特殊学級担任、中学校は教科担当者、以下、特殊学級担任とし表記）が、児童生徒の既習事項の内容や理解の程度をどのような方法で把握しているのかについて示したものであり、【図4】は、その理由について示したものである。

主な実態把握の方法として、小学校では75.4%、中学校では67.8%の特殊学級担任が「児童生徒との面談及び授業における観察」をその方法としてあげており、その理由として「理解できていることと理解できていないことが分かるから」という回答を8割以上の特殊学級担任があげていることが分かった。これに対して、市販のテストは、小・中学校ともに3%に満たないことが分かった。これは、市販のテストが、特殊学級の児童生徒の実態や学習内容や学習の進捗状況に即したものになっていないことが理由として考えられる。また、自作のテストについては、学校の年間計画の中に、定期テストという形で設定されている中学校が多いことから、小学校に比べると比較的实施されている状況にあると思われる。しかし、小・中学校の特殊学級では、児童生徒の理解や定着に開きがあることから、一人一人の実態にあったテストを作成することが困難であると考えられる。このことから、特殊学級担任の多くは、自らの目で直接児童生徒を観察する方法以外によりどころとする実態把握の方法がないのではないかと推察される。



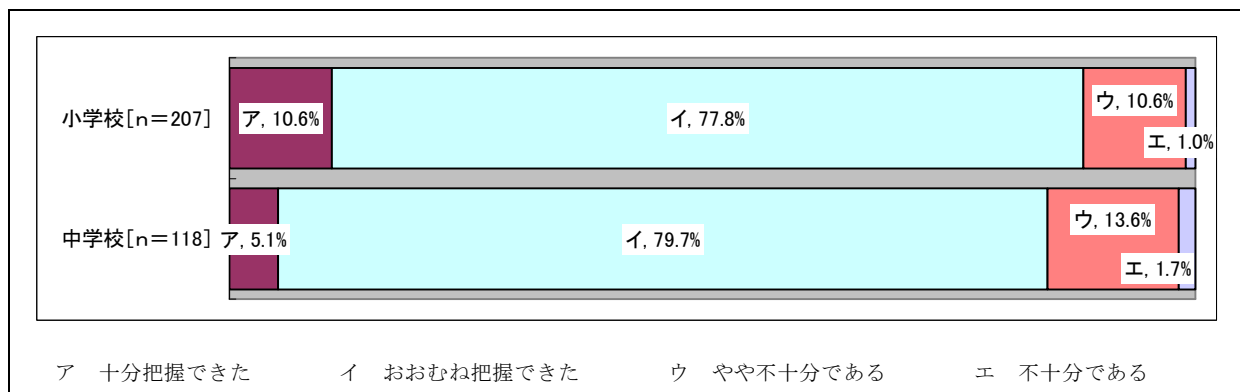
【図3】児童生徒の実態把握の方法



【図4】実態把握の方法を選んだ理由

イ 児童生徒の実態把握の状況について

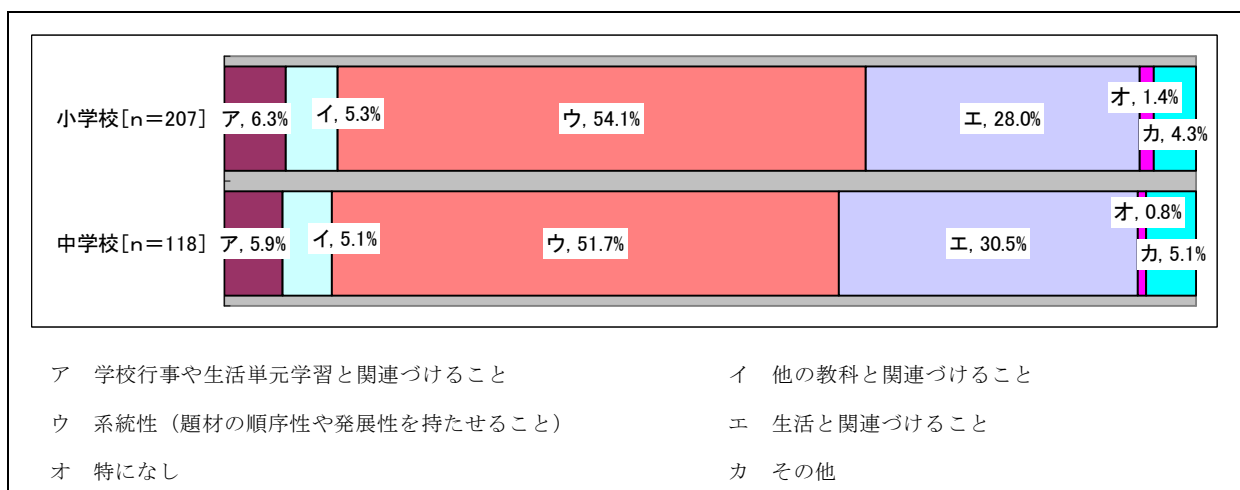
【図5】は、児童生徒の実態把握の状況についてまとめたものである。小・中学校ともに「十分把握できた、おおむね把握できた」ととらえている特殊学級担任が多く、小学校では88.4%、中学校では、84.8%を占めていることが分かった。これは、前述【図3】から明らかなように「児童生徒との面談及び授業における観察」という方法によって得られた実態把握の状況であり、「理解できていることと理解できていないことが分かるから」という根拠が基になっている実態把握の状況である。このことから、児童生徒の実態把握の状況は、特殊学級担任の主観的な実態把握の状況であり、客観性のある実態把握にはなっていないのではないかと推測できる。



【図5】実態把握の状況

ウ 題材設定の困難さについて

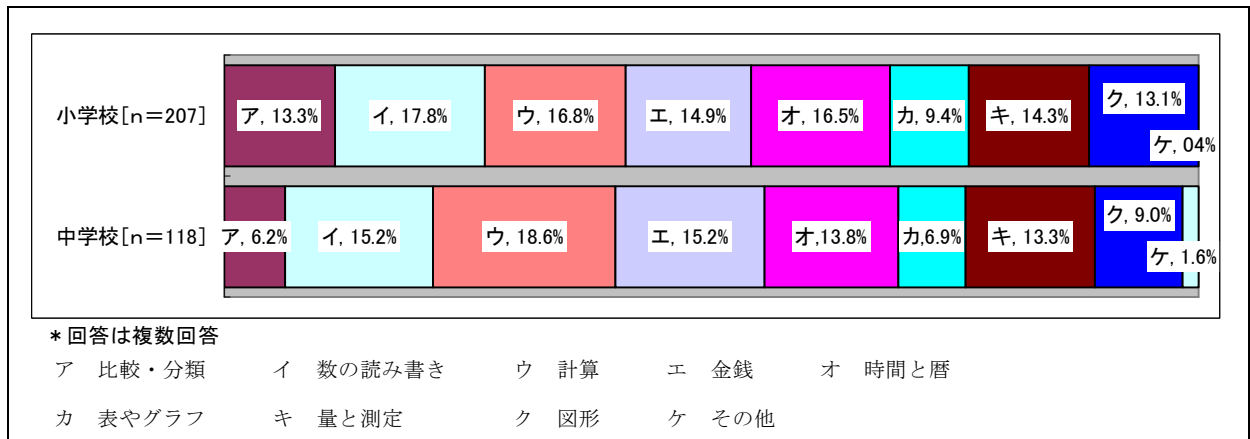
【図6】は、題材設定の困難さについて示したものである。小・中学校ともに「系統性」を一番難しいと思っている特殊学級担任が約半数いることが分かった。これに次いで「生活と関連づけること」をあげている回答も多く、小学校では28.0%、中学校では30.5%に達しており、「系統性」に次ぐ高い数値を示していることが分かった。これは、特殊学級における児童生徒が、学習内容を理解することに時間を要することや、これまで学習した内容と現在学習している内容を関連づけながら学習を進めていくことに困難さを抱えているためと思われる。また、「生活と関連づけること」を難しいと思っている理由として、児童生徒の生活感覚や生活実態に即した題材を設定することや、児童生徒が取り組みやすい活動を用意することが十分に行われていないからと推察される。このことから、特殊学級における児童生徒が自主的に題材に取り組み、成就感や満足感を得ることができるよう、実生活に密着した題材を設定するとともに、各題材間の関連性を児童生徒の実生活に即して明らかにしていくことが必要であると考えられる。



【図6】題材設定の困難さ

エ 小・中学校の特殊学級で扱っている算数・数学科の題材について

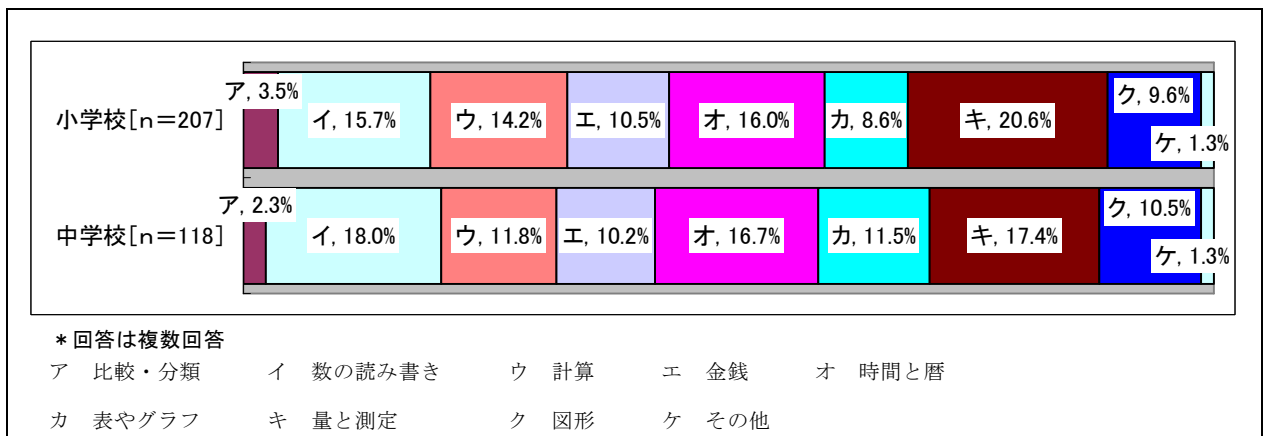
【図7】は、小・中学校の特殊学級で扱っている算数・数学科の題材について示したものである。この結果から、特殊学級で扱う題材には、小学校と中学校では大きな違いはないことが分かった。これは、前述のウの項で述べたとおり、特殊学級の児童生徒が、学習内容を理解することに時間がかかることや、これまで学習した内容と現在学習している内容を関連づけて学習を進めていくことが難しいととらえているためと考えられる。こうした児童生徒の実態を踏まえた上で、将来の生活における自立や自主的な活動ができることを目標として、小学校で学習した内容の定着を図るために、中学校でも同じ題材を取り上げて繰り返し扱うこととしているのではないかと推察される。



【図7】小・中学校の特殊学級で扱っている算数・数学科の題材について

オ 教えることが難しいと思う題材とその理由について

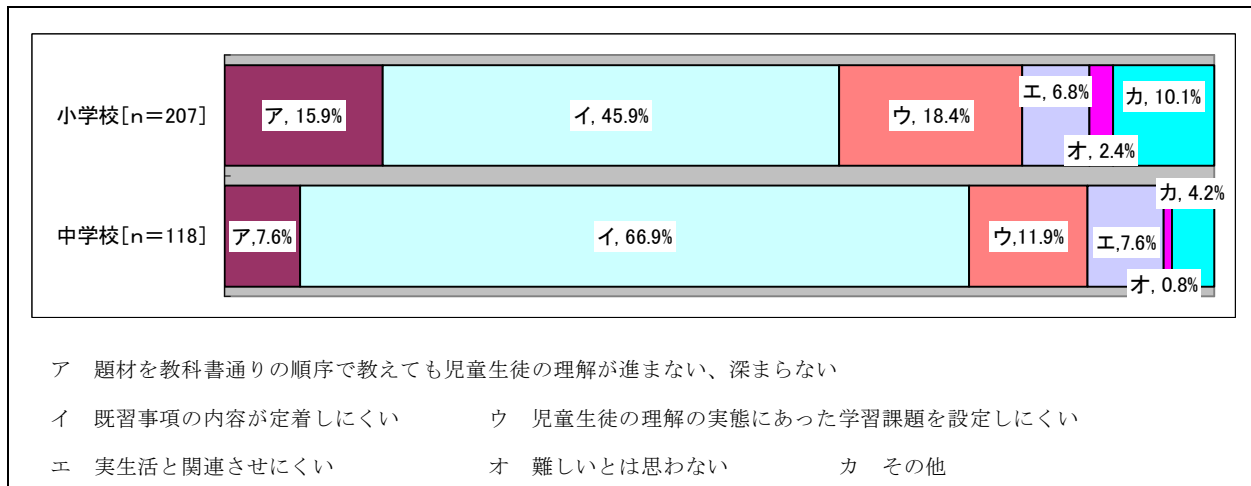
【図8】は、小・中学校の特殊学級で扱っている算数・数学科の題材の中で、教えることが難しいと思っている題材について示したものであり、次頁【図9】は、その理由についての結果を示したものである。小学校では「量と測定」、中学校では「数の読み書き」が最も多かったが、他のどの題材についても、教えることが難しいととらえていることが分かった。また、これらの題材を教えることが難しいと思う理由として「既習事項の内容が定着しにくい」という理由が一番多く、次に「実生活と関連させにくい」ということをあげていることが分かった。これは、単に特殊学級の児童生徒の知的な能力が低いからということだけではなく、教師や保護者が、学習した内容を学校生活の場面で活用するためにはどのような場面があるのか、家庭生活の中で繰り返し活用するためにはどのような支援が必要であるのかといった見方や考え方に立っていないからであると考えられる。このことから、特殊学級担任は、教えることが難しいと思っている題材について、特に児童生徒の実生活の実態に目を向ける必要があるのではないかと推察される。



【図8】教えることが難しいと思う題材

カ 教えることが難しいと思う理由について

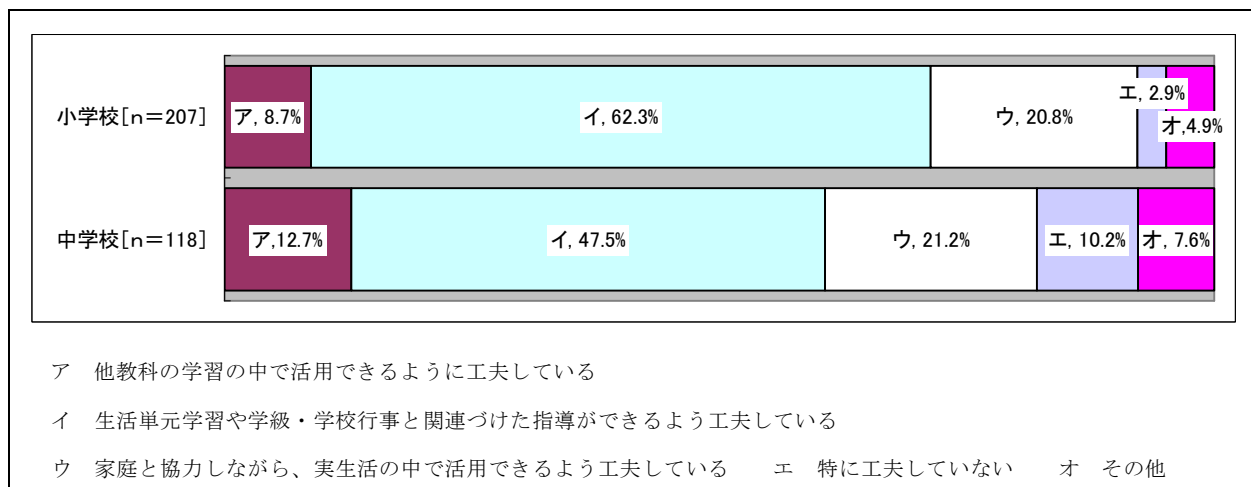
【図9】は、前項のオであげた題材の教えることが難しいと思う理由について示したものである。小・中学校ともに「既習事項の内容が定着しにくい」という理由が多く、全体の割合から見ると、小学校は約5割を占め、中学校では、約7割を占めていることが分かった。これは、前述の特殊学級における算数・数学科の指導の在り方の現状でも述べたとおり、特殊学級の児童生徒が算数・数学科の学習を苦手とする障害特性を有していることから推察される。



【図9】 教えることが難しいと思う理由

キ 題材を実生活に生かすための工夫について

学習した題材を実生活に生かすために工夫していることをまとめたのが【図10】である。小・中学校ともに「生活単元学習や学級・学校行事と関連づけた指導ができるようにしている」という回答が一番多く、「他教科の学習の中で活用できるように工夫している」という回答を合わせると小学校では7割、中学校では6割に達することが分かった。これに対して「家庭と協力しながら、実生活の中で活用できるように工夫している」と回答したのは、全体の2割しかないことが分かった。これは、特殊学級担任が、保護者と協力しながら実生活の中で活用できるようにするための具体的な方法や取組について、十分な検討をしていないからと思われる。



【図10】 題材を実生活に生かすための工夫

(6) 調査のまとめ

調査によって明らかになった内容を、調査仮説に即して次のようにまとめた。

〈調査仮説1〉

今回の調査の結果から、小・中学校の特殊学級担任の多くは、個別の面談や授業観察を実態把握の方法として行っており、客観的に実態を把握することの有効性に対する意識にまで及んでいないことが明らかになった。また、保護者との面談という方法を実態把握の方法として上げている教師が少ないことから、実生活における算数・数学科の活用状況を児童生徒の実態としてとらえている教師が少ないことが明らかになった。

〈調査仮説2〉

今回の調査の結果から、小・中学校の特殊学級担任の多くは、児童生徒の障害特性から系統性のある題材を設定することに難しさを抱えていることが明らかになった。また、実生活に即した題材を設定するために、題材間の系統性に視点を当て、題材を選考している教師が少ないことが明らかになった。

〈調査仮説3〉

今回の調査結果から、学習した題材を実生活に生かすために工夫していることとして、生活単元学習や学級・学校行事と関連づけた指導をしていることや、他教科の学習の中で活用できるようにしていることが分かった。また、家庭と協力しながら、実生活の中で活用できるようにしようとする取組に対して、困難さを感じている教師が多いことが明らかになった。

3 算数・数学科の指導と実生活との関連性を踏まえた手だて導の基本構想

- (1) 教材分析に視点を当てた算数・数学科の指導の在り方と実生活との関連性を明らかにするための基本構想

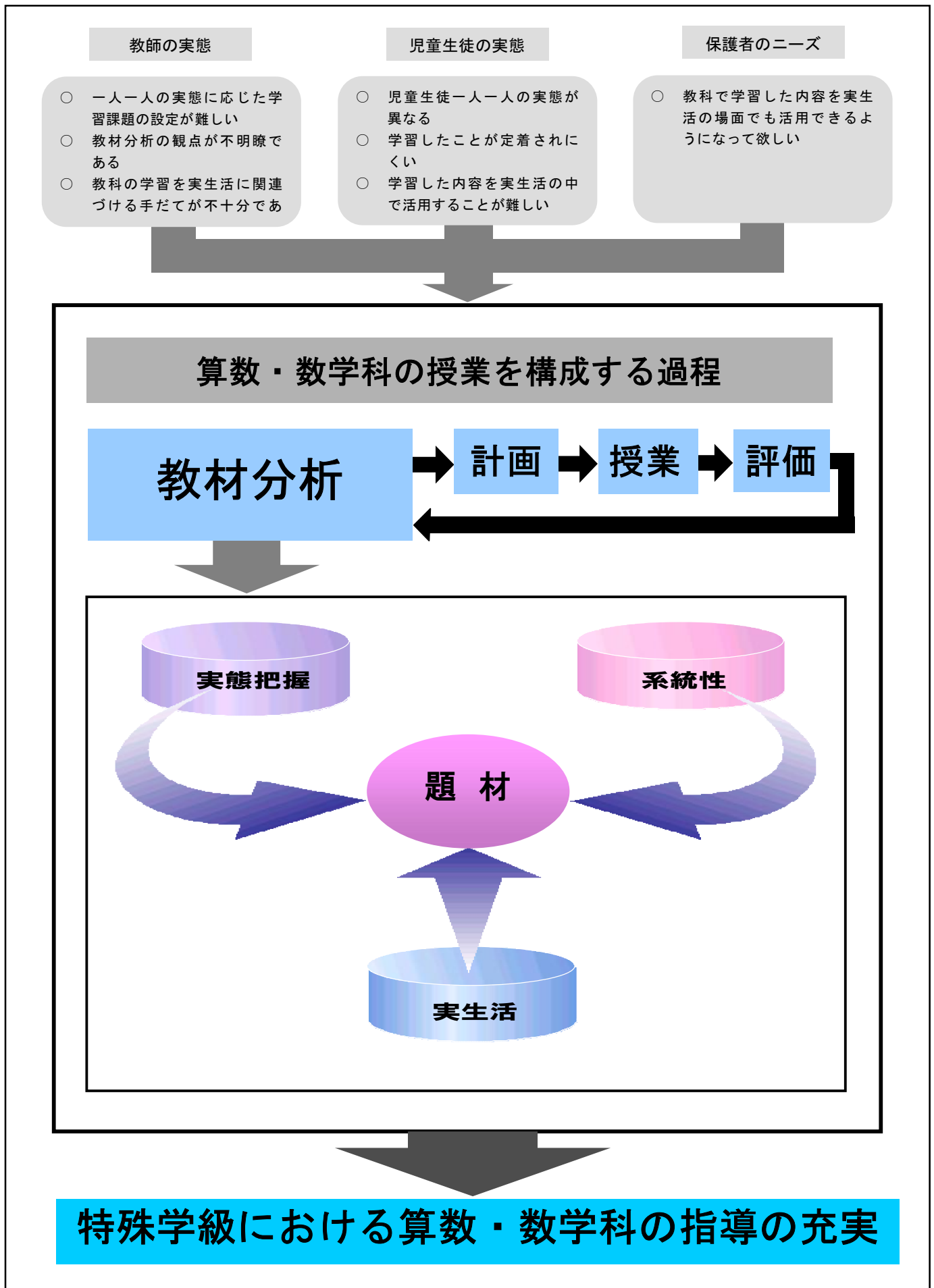
前述の調査結果から、特殊学級における算数・数学科の指導においては、「算数・数学科の既習事項の内容や理解の程度の実態把握が、客観的な方法によって把握することが不十分であること」、「児童生徒の実態にあった系統性を踏まえた題材の設定がなされていないこと」、「教科の学習における算数・数学科の学習の成果が実生活の場面で十分に活用されていないこと」などの課題を抱えている現状が明らかになった。

このことから、特殊学級における算数・数学科の指導の在り方の充実を図るためには、教材分析に視点を当てた具体的な手だてを構築する必要があると考えた。

したがって、本研究の基本構想立案に当たっては、前述の特殊学級における教科指導の在り方についての基本的な考え方に基づき、教材分析を、実態把握、系統性、実生活の課題の3つの視点からとらえ、それぞれの課題について具体的な手だてを構築する必要があると考えた。

- (2) 教材分析に視点を当てた算数・数学科の指導の在り方と実生活との関連性を明らかにするための基本構想図

これまで述べてきた基本構想を基に、教材分析に視点を当てた算数・数学科の指導の在り方と実生活との関連性を明らかにするための基本構想図を次頁【図11】のとおり作成した。



【図 11】 教材分析に視点を当てた算数・数学科の指導の在り方と実生活との関連性を明らかにするための基本構想

4 算数・数学科の指導と実生活との関連性を踏まえた手だての構築

(1) 算数・数学科の指導と実生活との関連性を踏まえた手だての構築に関する基本的な考え方
 前述の実態調査や教材分析に視点を当てた算数・数学科の指導の在り方と実生活との関連性を明らかにするための基本構想を基に、特殊学級における算数・数学科の指導と実生活との関連性を踏まえた指導の手だての構築に関する基本的な考え方を次のようにおさえた。

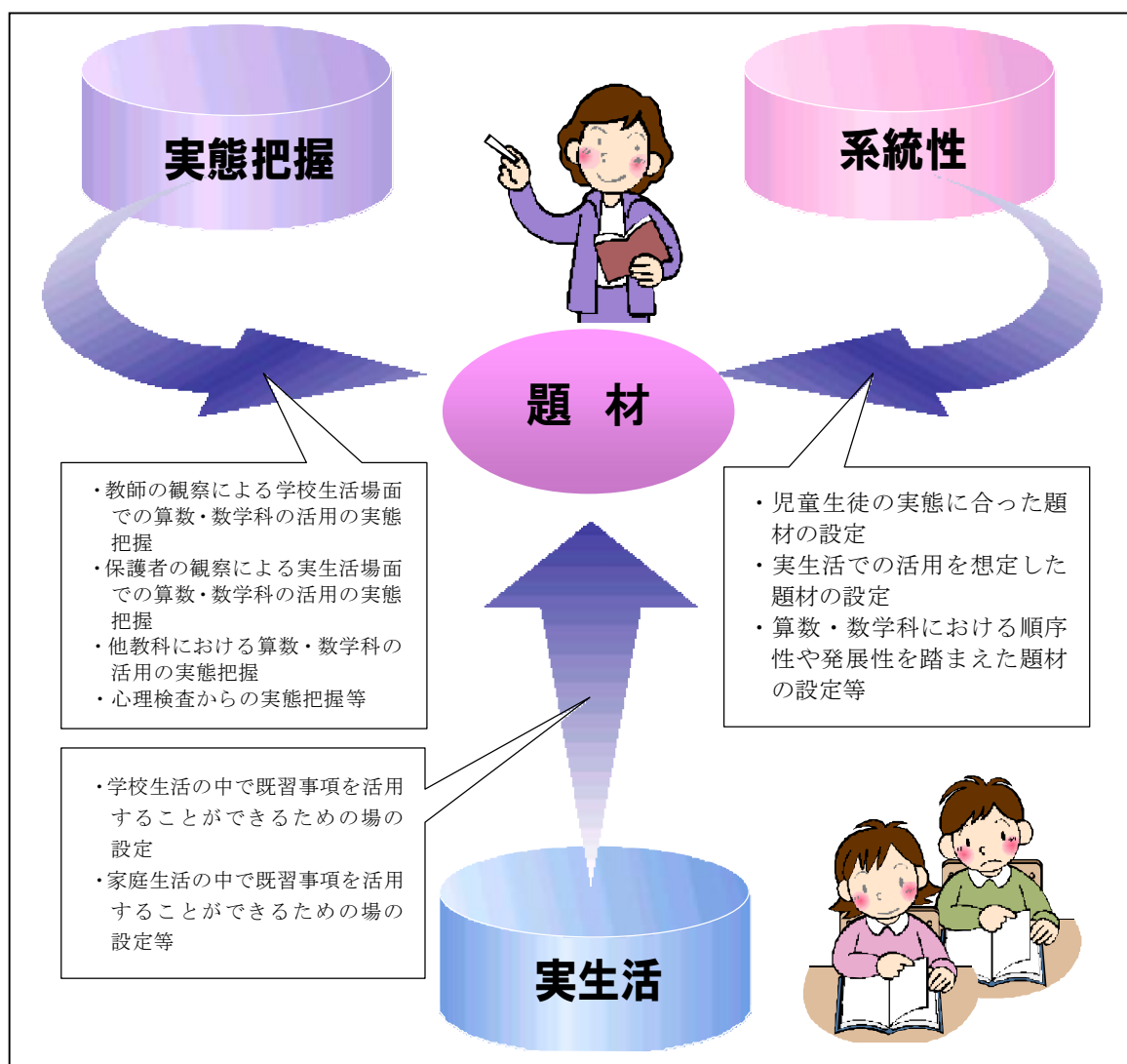
ア 客観的な実態把握をするための具体的な視点や方法を指導の手だての方向性と示す必要があること

イ 実生活に即した題材を設定するために、題材間の系統性を明らかにするとともに、児童生徒が自ら取り組みやすい活動と関連づける視点や方法を指導の手だての方向性として示す必要があること

ウ 学習した内容を実生活の中で活用できるように、実生活に即した題材を授業の中で扱うための視点や方法を指導の手だての方向性として示す必要があること。

(2) 算数・数学科の指導と実生活との関連性を踏まえた手だての方向性

算数・数学科の指導と実生活との関連性を踏まえた手だての構築に関する基本的な考え方を基に、算数・数学科の指導と実生活との関連性を踏まえた手だての方向性を【図 12】に示すこととした。



【図 12】算数・数学科の指導と実生活との関連性を踏まえた手だての方向性

V 研究のまとめと今後の課題

1 研究のまとめ

- (1) 特殊学級における教科指導の在り方についての基本的な考え方
特殊学級における教科指導の在り方についての基本的な考えとして、教科指導の現状と意義を踏まえ、教材分析の視点を明らかにすることができた。
- (2) 特殊学級における教科指導に関する実態調査と調査結果の分析・考察
県内の公立小・中学校すべての特殊学級（知的障害特殊学級・情緒障害特殊学級）の算数・数学科担当者を対象に実施した調査結果から、算数・数学科の指導の在り方について把握することができ、手だての構築につながる資料が得られた。
- (3) 実態調査結果に基づく算数・数学科の指導と実生活との関連性を踏まえた手だての構築
実態調査の結果に基づき、算数・数学科の指導と実生活との関連性について教材分析を実態把握、系統性、実生活の3つの視点からとらえることにより、算数・数学科の指導と実生活との関連性を踏まえた手だての方向性を立案することができた。

2 今後の課題

- (1) 算数・数学科の指導と実生活との関連性を踏まえた手だての基本構想に基づき、算数・数学科の指導と実生活との関連性を踏まえた手だての試案を作成すること
- (2) 算数・数学科の指導と実生活との関連性を踏まえた手だての試案を基に指導実践を行い、特殊学級における教科指導の在り方と実生活との関連性について検証すること

〈おわりに〉

この研究を進めるに当たり、ご協力いただきました研究協力校の先生方、県内のすべての公立小学校、中学校の特殊学級担任の皆様にご心からお礼を申し上げます。

【引用文献】

- ・宮崎直男（1985），『養護学校の授業入門』，明治図書 p 36
- ・総合教育センター（2004），『特殊学級担任研修ブック「生きる力」をはぐくむために』 p 27

【参考文献】

- ・細村迪夫（2000），『障害児教育の教育課程』，コレール社
- ・愛知県立総合センター（2004），『特殊学級（知的障害）教育課程』
- ・群馬県総合教育センター（2005），『すべての教員のための特別支援教育入門ガイドブック』
- ・藤原鴻一郎（1995），『発達に遅れがある子どもの算数・数学 数と計算編』，学習研究社
- ・藤原鴻一郎（1995），『発達に遅れがある子どもの算数・数学 量と測定編』，学習研究社
- ・林邦雄監修 米光みつ子著（1997），『必須言語としての数概念の指導1 基礎をきずく』，コレール社
- ・林邦雄監修 米光みつ子著（1998），『必須言語としての数概念の指導2 生活にひろげる』，コレール社
- ・全日本特殊教育研究連盟（1996），『発達の遅れと教育〔特集〕生活に生きる算数・数学』No.464，日本文化科学社
- ・全日本特殊教育研究連盟（1997），『発達の遅れと教育〔特集〕教科別による学習活動の展開』No.483，日本文化科学社